慈濟ものがたり

人々がヒーローとなって復旧への道を切り開く

撮影・黄筱哲

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運

宗教が打ち解け合い、共に福音を伝える

この世は無常ですが、人には愛がありますから、
宗教が打ち解け合えば、やがて真理に通じるのです。
慈善奉仕で苦を楽に変え、
共に福音を伝えることで、この世に幸福をもたらしましょう。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
善念が受け継がれ復興に手が届く　善耕／訳　4

【今月の特集】
花蓮・馬太鞍渓せき止め湖溢流災害支援記録
光復郷の復興　清掃して輝いた　御山凛／訳　8
愛は双方向の交流　葉美娥／訳　46

【親と子と教師、三者の本音】
機知に富んだ部活動　江愛寶／訳　51

【證厳法師のお諭し】
菩薩が増えることはこの世の慶事　慈願／訳　56

青思修
チマキを作る夏のリサイクルステーション
烏日に達人が集う　江愛寶／訳　62
素晴らしい菜食生活　江愛寶／訳　68

【グローバル慈善】
インドネシア眼科施療
百人の白内障患者に新たな視野が開けた　施燕芬／訳　75

【この手で大地を守る】
マレーシア　グリーンアクション体験型展示会
明日の地球を守る　今こそ行動を　江愛寶／訳　86

【行脚の軌跡】
心配を敬虔な心に変える　済運／訳　100

慈済の出来事　11/22－12/22　済運／訳　106

表紙

馬太鞍（ファタアン）渓のせき止め湖の氾濫による洪水と土砂で甚大な被害を受けた花蓮県光復郷では、台湾全土から集まった人々が「シャベルヒーロー」になり、リレー方式で被災者の家の泥かきを行った。

台湾北・中・南部の慈済ボランティアはチームを組み、列車やツアーバスで光復郷に赴いて、清掃活動に参加した。これまでの延べ参加人数は２万１千人を超えた。
（撮影・李彦綸）

編集者の言葉

善念が受け継がれ復興に手が届く

文・呂祥芳（月刊誌『慈済』副編集長）　訳・善耕

花蓮県馬太鞍（ファタアン）渓に形成されていたせき止め湖の溢流から三日目の九月二十五日、友人が私に、ＳＮＳのグループで送られてきたという連絡を転送してくれた。その中の写真には、紺色のシャツに白いズボンのユニフォーム姿で白髪まじりのボランティアの姿があり、被災者の家の中の泥をシャベルでかき出そうと、奮闘していた。しかし、悲しいかな、泥は乾いて固くなっており、何回シャベルを突き下ろしても徒労に終わった。三百件以上のコメントをスクロールしていると、皮肉っているものや心が痛むといったコメントもあったが、救援活動を加速するために被災地に行って支援したいとか、道具を寄付したいと表明する人も現れ始めた。

月刊誌『慈済』執筆者の葉子豪（イェ・ヅーハオ）さんは、まず九月末にボランティアとして清掃活動に参加し、さらに十月初旬に被災地に戻って取材を行った。その時、慈済ボランティアの数倍の人数の人々が自主的に参加していて、その大多数が若者だったことが分かった。

多くの若者が、ＳＮＳを通じて自分たちの体験をリアルタイムでこう共有していた。「一緒にシャベルで泥を掬っていた白髪のボランティアたちは、若いパートナーに食事の世話をしたり、適時に休むよう促したりしていました」。「淤泥（おでい）は厄介でしたが、やっとのことで、床が見えました」。住民もボランティアも特に感じるものがあった。

ソーシャルメディアの影響力により、「人助けを喜びとする」という話題が瞬く間に広がり、善念が同時に共感を呼び、実際の行動に変わった。メディアは、自発的に被災世帯の住宅を清掃した大勢のボランティアを「シャベル・スー

パーヒーロー」と称賛した。それは、「スーパーマンになるにはマントは必要なく、奉仕する気持ちさえあれば、誰でもヒーローになれる」という意味である。

災害が発生すると、お金がある人はお金を出し、力がある人は力を出し、誰もが自分の能力に応じて貢献するようになった。ＩＴ産業界や飲食業界、重機チーム、水道・電気関係、指圧マッサージ、文具業界、清掃・消毒業者など、あらゆる分野の人々が専門知識を活かして支援に駆けつけた。さまざまなスーパーヒーローたちが手を差し伸べ、被災地全体が深い泥に浸かった絶望感から徐々に抜け出し、週を追うごとに復旧の兆しを見せていく。これらの様子を捉えた写真は、月刊誌『慈済』の撮影記者、蕭耀華さんが一枚一枚撮影したものである。

月刊誌『慈済』記者の周伝斌（ヅォウ・ツウァンビン）さんの今夏の取材は、ほぼ全てが台風被災地で行われた。彼は台風４号（ダナス）から台風１８号（ラガサ）まで、炊き出しや清掃、施療、祝福の贈り物と慰問金の贈呈、家屋の修繕、再利用できるようにしたパソコンの提供などの活動を記録したが、それらは慈済の援助の標準作業手順書とも言える内容だった。

台湾は台風や地震など災害の多い地域に位置しているが、今回のせき止め湖の溢流による災害は非常に稀である。周さんは、災害直後に見聞きした事を臨場感のある、繊細な筆致で描写した。しかし、懸命な救助活動の裏には、実は一抹の感傷も潜んでいた。

ボランティアたちが光復郷に結集して、被災者に慰問金を手渡していた頃、慈済が〇四〇三花蓮地震の後に建設していた五階建ての「大愛の家」が完成に近づき、家具の設置段階に入っていた。慈善活動は災害後のニーズに応じて異なるが、共通する目標はただ一つ、人々の安身（落ち着ける場所）、安心（心の安らぎ）、それに安生（安定した生活）を確保することである。

（慈済月刊七〇八期より）

今月の特集

花蓮・馬太鞍渓せき止め湖溢流災害支援記録

光復郷の復興 清掃して輝いた

写真編集・黄筱哲（月刊誌『慈濟』撮影者）訳・御山瀑

花蓮の馬太鞍（ファタアン）渓でせき止め湖が決壊し、大規模な洪水が光復郷の市街地を直撃し、台湾災害史上極めて稀な事態となった。その後の救援活動では、民間人が自発的に最も迅速かつ最大規模の行動をとった。人々の志が結集し、泥濘の中から希望へ続く道を切り開いた。

（花蓮光復郷　2025・9・28　撮影・陳李少民）

洪水を乗り越えて

花蓮県光復郷、旧称「馬太鞍（ファタアン）」はアミ族の居住地である。市街地脇を流れる馬太鞍渓は、上流にできたせき止め湖が9月23日、台風18号（ラガサ）による豪雨で溢流した。わずか30分のうちに1500トンを超える濁流と土砂が一気に流れ出し、下流の堤防と橋を押し流し、肥沃な農地と市街地をのみ込んだ。翌日の光景では、大量の泥が堆積し、かつての農地の姿は消え失せていた。写真奥は光復郷の市街地。（撮影・張永同）

依然として続く警戒

馬太鞍渓の下流に位置する万栄郷、鳳林鎮、光復郷が被災した。地形が平坦な光復郷の被害は特に大きく、14の村のうち10の村に及んだ。一部の地域では、水深が一階建ての家屋を超えるほどに達した。災害後、馬太鞍渓の河床は土砂で高くなり、河畔の大平村・仏祖街や、村の信仰の中心である保安宮では、1・5メートルを越える泥が堆積した。せき止め湖は、溢流後に水量が徐々に減少したが、「レッドアラート（最高警戒レベル）」は10月中旬になっても解除されなかった。（撮影・王賢煌）

台風十八号による 馬太鞍渓せき止め湖溢流災害

せき止め湖の形成

- 2024年0403大地震により、花蓮県の山岳地帯の土壌が緩んだ。
- 2025年7月中旬から下旬にかけて、台風6号による豪雨の影響で、馬太鞍渓の上流で大規模な斜面崩壊が発生し、崩れ落ちた土砂が川をせき止めた。

溢流前の状況

- 8月から9月にかけてのたび重なる降雨により湖水面積が広がり、水位が上昇した。さらに、台風18号による豪雨で水位が臨界線を越え、ついに溢流が発生した。

災害の発生

- 9月23日、湖の天端から溢流が起こり、湖本体が決壊した。およそ30分の間に約1540万トンもの湖水が一気に流出した。洪水のピークが下流に到達し、橋梁の流失と大規模な被害をもたらした。
- 溢流口の浸食速度は次第に緩やかになったが、下流の河道では土砂の堆積が続き、浚渫（しゅんせつ）・導流・防御作業が必要であったため、「レッドアラート」は継続された。

■ 影響範囲

影響の範囲

- 馬太鞍渓橋が洪水によって押し流され、南北を通る台9号線が遮断された。
- 下流の光復郷市街地は、洪水と泥流で深刻な被害を受けた。また、鳳林鎮と万栄郷の一部の村落も影響を受けた。
- 1800世帯余りが避難し、1600世帯余りが被害を受けた。さらに、19人が死亡、5人が行方不明、157人が負傷した。

清掃協力　慰問金と安心祝福セットを贈呈　被災地に食事を提供

泥流が引いて人々が流入した

光復駅は、清掃ボランティアの集結拠点となった。政府や各救済団体もここに拠点を設けた。災害発生後、最初の週末は教師節の連休と重なり、多くの民衆が駅前広場で慈済ボランティアの列に加わって、清掃活動に出発した。（撮影左・陳李少民）

慈済四大志業の管理職及び職員たちや各地から来たボランティアも駅前に集合し、清掃活動に割り当てられた地域へ向かった。（撮影下・蕭耀華）

再建の始まり

洪水が引いた後、屋内外問わず堆積した粘り気の強い泥はずっしりと重く、泥水はまるでセメントのようで、清掃は困難を極めた。主要な幹線道路には、横転した車両や瓦礫の山ができた。災害後は大量の泥とごみの除去作業に加え、県政府と国軍の化学部隊や各方面からの支援で、大規模な環境消毒が実施された。住民たちは、困難な状況の中でも家の再建に向けて作業を始めていた。(撮影・魏国林)

複合災害後の幅広い支援

清掃活動、緊急医療支援、慰問金の配付、専門的な修繕といった慈済の災害支援は、段階的に進められると共に、他の団体とも協力して、日常生活を取り戻せるように被災者を助けた。

周伝斌（月刊誌『慈済』執筆者）訳・御山凛

近年、人々は自然災害現象を「複合災害」という概念で理解するようになっている。地震・豪雨・台風など複数の要因が重なり合うと、対応が困難な災害を引き起こす。今回の馬太鞍渓せき止め湖の溢流では、数千万トンもの量の水が泥砂を伴って、人々の日常生活の秩序をのみ込み、尊い命までも奪った。突発的で対応が追いつかない災害は、避難・復旧・衛生といった多くの問題を引き起こす。慈済はさまざまな面で被災者の苦しみをできる限り和らげるために、四大志業が参加している。

「何人かの住民は靴を履いておらず、履く靴さえないために、一日、泥水の中に足が浸ったままでした。彼らの多くは高齢者でした」。慈済基金会の顔博文（イェン・ボーウェン）執行長はシャベルを置きながら、「泥がまだ完全に乾かないうちに、ボランティアや職員、そして外から来た民衆も一緒に協力して作業を始めなければなりません」と言った。

復興へまっしぐら　多方面で始まった民間の支援システム

災害発生の翌日、顔博文執行長とそのチームは、数世帯を続けて訪問し、午後には一般の人々に向けて広く人手を募り始めた。まず政府と話し合い、光復駅に近い幾つかの集落を優先的に担当し、「ボランティアが光復駅に到着したら、直ちに支援活動に入れるようにしました」と説明した。最優先の課題は住民が生活を取り戻すための手助けをすることであり、その後すぐに慰問金の配付も行われた。

初日から、花蓮の地元ボランティアが自発的に駆けつけた。慈済基金会も職員にボランティア休暇の申請を認め、さ

９月２６日、臨時第二医療コーナーを設置してからわずか１０分も経たないうちに、台南市特別捜査隊の協力で、ボランティア１名が搬送されてきた。診断後、まず点滴と薬の投与を行い、その後、病院へ移送した。（写真提供・花蓮慈済病院）

らに花蓮慈済病院救急外来スタッフは、夜勤を終えるとその足で被災地へ直行した。

花蓮慈済病院は災害発生の翌日、光復製糖工場に臨時医療コーナーを設置した。その後、さらに被害の大きかった地域へ支援を広げ、第二、第三の医療コーナーも開設した。そのうちの一つは、家主の許恒瑞（シュー・ヘンルイ）さんが快く提供してくれた場所で、「些細なことです。光復郷を助けに来てくださった慈済や多くの方々に感謝しています」と許さんは語った。また、大進小学校に避難している住民の多くは高齢者であったため、ボランティアが医療コーナーでの施療に送迎を行った。

慈済のソーシャルワーカーと訪問ケアボランティアは、慰問金の配付を同時に準備し、十月上旬から大安村、大同村、大華村、大馬村、東富村のアトモ集落で実施した。二千世帯余りが支援を受けた。

「このような時は、適切な配付会場を探すのがとても困難です」。花蓮のベテランボランティアである黄麗雲（フワオン・リーユン）さんによれば、会場は、住民が来やすい場所であることに加え、待合

慈済は、被災した5つの集落2000世帯余りに慰問金と安心祝福セットを贈呈した。慈済のソーシャルワーカーが資料を照合していた。（撮影・蕭耀華）

エリア、受付、相談スペース、物資の置き場を確保できる広さも必要で、順路をスムーズにし、人々の快適さに注意を払わなければならなかった。

泥の除去から再建へ
緊急支援から日常生活の回復へ

中秋節の連休が終わると、静思精舎の修繕チームが被災地で修繕を開始した。災害後の復興に何度も参加してきた専門ボランティアたちは、まず慈済の法縁者と生活困窮世帯、そしてケア世帯を対象として取り組んだ。十月九日、彼らは大馬村を訪れ、或る慈済大学生の住宅修繕を手伝った。窓枠もガラスも洪水で壊れ、家の中の家具や電化製品が泥の撤去作業と共にすべて運び出されていたので、今この家に残っているのは、四方を囲む灰色の壁、そして政府が設置した照明器具二つと水道の蛇口一つだけだった。

修繕チームリーダーの陳重光（チェン・ツォングオン）さんは、「私たちの原則は、まず生活に欠かせない水道や電気の復旧を優先し、さらに住む人のプライバシーにも配慮することです」と述べた。水道管はすでに泥で詰まっており、シャワーヘッドや蛇口、トイレなどの衛生設備は、再

１０月上旬、同時に修繕作業が始まった。（撮影・蕭耀華）

び配管をつなぎ直すか、詰まりを解消するまで使用できなかった。ボランティアの陳進中（チェン・ジンゾォン）さんは、トイレ、台所、そして屋外の浄化槽を何度も行き来して点検した。その後、別のボランティアたちが「福慧ベッド」と「福慧間仕切りテント」を運び込み、就寝時に自分の空間を確保できるよう配慮した。

様々な地方の様々な分野から集まった慈済人が、それぞれの得意分野で力を尽くし、災害後の複雑で混乱した状況の中で、住民が再び日常の生活を取り戻せるようにと支援しているのだ。

世に情あり
手を取り合って共に善を成す

花蓮に隣接する台東や西部の各県市からも人員や機材が光復郷に派遣されて、支援にあたった。光復製糖工場（現在は花蓮観光製糖廠）が災害対応センターとなり、中央と地方政府、国軍などの部署が前進指揮所を設置した。民間からの支援も迅速に集まり、光復製糖工場に隣接する大進小学校の避難所を見ると、生活必需品や食料が整えられ、住民が自由に利用できる状態になっていた。

国際ＮＧＯワールド・ビジョンは、大進小学校の図書エリアにスペースを設けて、家を失った子どもたちに寄り添った。「災害が起きるといつも、子どもたちは最も弱い立場に置かれます。だからこそ、私たちはこの部分に資源を集中させ、活動や寄り添いを通して子どもたちの心を落ち着かせたいと考えています」。ワールド・ビジョンでソーシャルワーカーの総指導にあたる唐文柏（タン・ウェンボー）さんが言った。

各界の人々が光復郷に到着して最初に向かう場所として、光復駅は、慈済に続いて官民のさまざまな団体が次々と到着した。国軍花蓮総病院は医療ステーションを設置し、台湾マスタードシード・クリスチャン教会は物資の補給を担当した。また、長時間の清掃作業で疲労したボランティアのために、推拿（すいな）師が自ら進んで施術し、筋肉痛を和らげていた。

清掃作業を始めて数日間、何人かの慈済ボランティアが、作業を終えて電車に乗る前の人たちの長靴を洗っていた。その後、若い人たちによっていくつもの動線が整えられ、靴を洗い、全身に消毒液を噴霧し、最後に手指のアルコール消毒する、という一連の工程の流れが設計、システム化され、スムーズに行われた。

長年にわたり災害後の支援活動に携わってきた慈済ボランティアは、今回これほど多くの若者が参加した光景を見て驚き、そして新しい世代がこんなにも力を尽くしてくれる姿に胸を打たれた。これほど多くの人手と物資、そしてさまざまな組織や官民の協力があったからこそ、災害からの復旧が加速した。

（慈済月刊七〇八期より）

清掃を終えて電車に乗る前の「シャベルヒーロー」たちは、長靴を洗浄してもらい、泥を車内に持ち込まないようにしていた。（撮影・沈秀華）

光復郷の復旧前後の様子

10月9日の午後、光復第一市場は静まり返り、人影のない路地にはわずかに光が差し込むばかりだった（上）。2週間前には、四方から泥流が押し寄せて路地や市場へと流れ込み、泥水が家具や電化製品を飲み込んで、住民の家の入口やシャッターを塞いでいた場所とは信じ難いほどだ（左）。救助隊と重機が、これら堆積した泥や壊れた物をすべて取り除いた。

（撮影・蕭耀華）

9月下旬、光復駅前の中華路では、清掃ボランティアが午後の作業を終え、道具を押しながら帰路についた（上）。2週間後の路面には、散水車や消防車が洗浄した水跡だけが残っていた（右）。

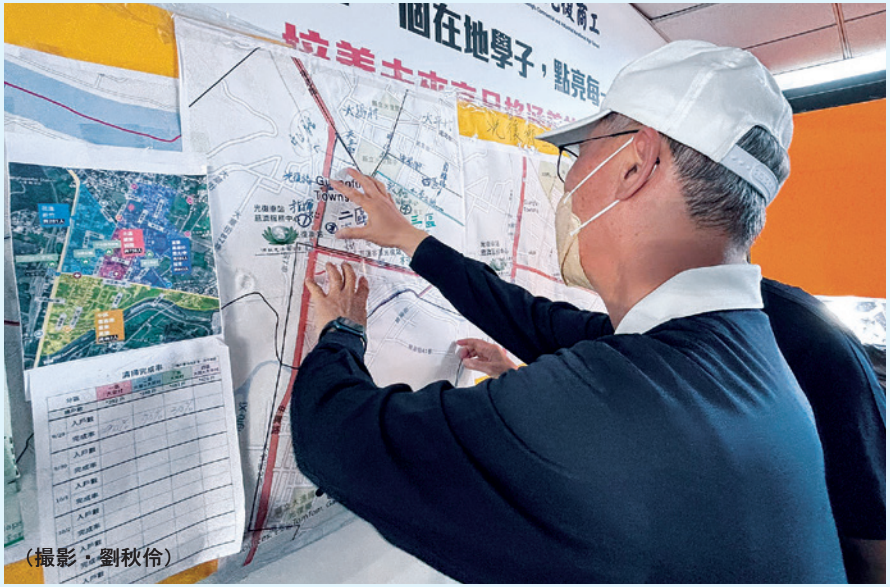
（撮影・蕭耀華）

慈済支援のまとめ

（2025年10月21日までの統計）

- 食事提供：40、441食
- 避難用物品：1、448点
- 家屋清掃支援：1、121戸
- 施療サービス：延べ4、600人
- 安心祈福セット：3、106個
- 再生パソコン：106台
- キッチンカーによる食事提供：47、960食
- 清掃ボランティア：延べ21、337人
- 慈済ボランティア動員数：延べ26、113人
- 医療・健康携帯セット：1、202個
- 慰問金の配付：2、670件

慈済のキッチンカーはモジュール化された設計で、鍋などの調理器具は一般の厨房と変わらない。料理ができる慈済ボランティアや一般の人なら、すぐに扱えるようになっている。ボランティアたちは、リレー方式で17日間にわたり4万7千食以上の雑炊やスープ麺などを調理した。（撮影・王嘉彬）


（撮影・劉秋伶）

大勢のボランティアが波のように光復郷に流入する中、慈済チームはネットで申し込みを受け付けた参加者を迅速に、指定の作業地点へ誘導することで（下の写真）、駅前の混雑を避けた。慈済が光復駅に設置した現地指揮センターでの会議で、顔博文執行長が最新情報をまとめ（上の写真）、当日の作業についてメンバーと話し合った。

（撮影・陳信安）

慈済の光復郷緊急支援　5つのハイライト

効率的な人員編成

申し込みをオンラインで受け付け、現地でチームに分け、「10人1組」の小人数制により、数千人のボランティアを効率的に統合、誘導した。

援助の一線で食事提供

被災地域に複数の拠点を設けてボランティアが近くで食事を受け取れるように計らい、長距離移動の負担を減らすことで、作業の効率と安全性を高めた。

行政区分を越えた食事支援

各地の静思堂での日頃の訓練と、近隣チームの応援により、大量のお弁当を安定して提供できた。

キッチンカーで迅速な支援

鉄道の駅前に常駐し、温かい食事を望む声に迅速かつ継続的に対応した。

慈善活動の累積

迅速な対応は、日頃から培われてきた機能チームの分業且つ息の合った連携によるものであり、単発の動員によるものではない。

シャベルヒーローの皆さんに感謝

ヒーローたちは、すでに被災地にいるか、今向かっているところだ。
これは、百里の道のりを越え、時間と競う「シャベル・ストーリー」である。

（花蓮県光復郷　2025・9・28
撮影・蔡麗瑜）

ヒーローたちが続々と現れ、復旧への道が開けた

災害発生の翌日から双十節の連休にかけて、台湾鉄路の統計によると、光復駅の利用者は延べ50万人近くに達したという。国軍だけでなく、自発的に駆けつけた一般市民も救援に加わり、最多の日には5万人を超えた。各地から出発した「シャベルヒーロー」たちが各駅に溢れ、列車内の通路や床には座り込む人と、さまざまな清掃用具でいっぱいになった。指定席がなくても構わない、立ち席でも行く。今この瞬間、皆が花蓮のために在る。（撮影・許永豊）

（撮影・魏国林）

花蓮にできた「シャベル」の地
泥の中に あなたも私もいる

壁には人の背丈の半分を超える場所に水痕が残り、スキッドステアローダーやショベルカーが入れない屋内は、人力での作業になる。高温と異臭の中での泥かきは、体力を一気に奪われる過酷な作業だ。それでも、立場も年齢も違い、互いに面識のないボランティアたちが声を掛け合い、住民とともに奮闘する。バケツリレーで泥を運び出し、続いて高圧洗浄機や小型重機が次々と投入される。床がようやく空になったところで、復旧への道がようやく始まる。

（撮影・陳李少民）

愛は双方向の交流

住民は泥水の中で嘆いていたのではなく、道具を持って一緒に清掃していた上に、残り少ない飲料水を遠くから来たボランティアに分け与えた。災害支援とは双方向の力だと感じた。住民の気丈さが現場の雰囲気を支え、私たちが継続して奉仕する原動力となった。

文・林洛頡（国立台湾師範大学付属高生）
訳・葉美娥

実を言うと、自分が被災地の泥の中でシャベルを振るうとは、想像もしていなかった。私は、休日は大体家で過ごしている。机、椅子、エアコン、スマホのある場所、それが最も馴染みのある生活空間である。体力はそこそこだが、「炎天下で長時間作業できるか」と聞かれたら程遠いものだ。こういう調子なので、家庭教師から光復郷で奉仕することを聞いた時、「自分には無理だよ」という思いが頭をよぎった。

しかし、運命はいつも私たち自身で選択できるとは限らない。その日は、いつものように家で睡眠を補い、読書するつもりだったが、突然友人からメッセージが届き、一緒に光復郷に行かないかと誘われた。まるで週末の散歩に行くような軽い口調だった。

私は暫くあっけにとられ、言い訳を探して断るつもりだった。しかし、メッセージに返信しようとした瞬間、突然言われのない衝動に駆られた。善の気持ちが沸き起こったのか、それとも友人に笑われたくないだけだったのか、私は思わず「いいよ」と返事してしまったのだ。そうして、不安と訳の分からない熱意が入り混じった気持ちで、光復郷に向かう列車に乗った。

被災地に入ると、映像からは決して真の被害の程度が伝わらないことを、私は思い知った。道の両側の家は、破れた紙切れのように壁が壊れ、家具が散乱し、空気には泥水と湿気が入り交じった臭いが充満していた。それは「震撼」と言う二文字では言い表せないほど、心に重くのしかかった。その時、自分がここに来たのは、単に「手伝う」ためだけではなく、現場に立ちあうために来たように感じた。

作業は楽ではなかった。数十分も経たないうちに両腕の筋肉が痛み出して力が入らなくなり、靴が何度も泥から抜けなくなって、一歩進むのも大変だった。周りのボランティアと比べると、私は不器

用で動きが鈍かった。でも不思議なことに、誰も眉をしかめたり、嫌悪感を表したりすることはなかった。黙って重い作業を引き受ける人もいれば、体力を消耗しない方法を教えてくれる人もいた。無駄な会話は一切なかったが、まるで以前から同じチームだったように、暗黙の了解があった。

さらに感銘を受けたのは、地元住民の姿だった。自分たちの家が全壊したにもかかわらず、彼らは瓦礫の中に座り込んで嘆き悲しむどころか、道具を手にして、ボランティアと一緒に清掃に取り組んでいた。彼らの顔には、疲労は見られたものの、芯の強さを見て取れた。

泥を掬いながら、足元に気を付けるよう人々に注意を促していた人もいれば、残り少ない飲料水を遠くから来たボランティアに分け与える人もいた。その時私は、災害支援は単に私たちが「彼らを支援する」だけでなく、双方向の交流であることを感じた。そのような住民たちの気丈さが現場の雰囲気を支え、遠くから駆けつけた私たちにとっても、奉仕し続ける原動力となったのである。

最後に泥だらけの手袋を外した時、私はふいに、今回の旅で変ったのは、光復郷の土地だけではなく、私というごく普通の男子だったことに気づいた。こっそりとではあるが、変化があった。頑丈な体も特別な技術も持っていないが、一歩踏み出す決意さえあれば、無数の見知らぬ人たちと一緒に、「団結」という力を出すことができるのだ。

家に帰った日は、ずっと考えていた。もしかしたら、真の力とは、どれだけ強いかではなく、「自分」を同じ土地に置く意志があるかどうかだけなのかもしれない。

高校生の林洛頡さん（中）が支援に参加。（撮影・李彦緯）

十八歳で参加した映画のようなワンシーン

口述・林展毅（明倫高生）　整理・王孟加（慈済ボランティア）

心では準備をしていたものの、光復駅から外に出た時はショックを受けた。一階部分がほぼ全壊した家を目の当たりにし、まるで映画のワンシーンを見ているかのようだった。ボランティアたちは台湾全土から集まった人で、お互いに面識がないのに、暗黙の了解の下で仕事を分担していた。また、多くの人が食料や飲み物を寄付し、医療サービスを提供してくれたお陰で、私たちは安心して支援活動を行うことができた。

私は子供の頃からスポーツをしていたので、体力には多少自信があったが、この時の泥の粘り気は見慣れているものとは違っていて、よく靴が泥にはまり、抜け出すのにとても苦労した。出発する前、勉強に影響するのではないかと心配して躊躇っていたが、十八歳という体力が絶好調な時に、光復郷の復旧のため、力を尽くそうと決めた。

（慈済月刊七〇八期より）

親と子と教師、三者の本音

機知に富んだ部活動

◎文・李秋月（高雄区慈済教師懇親会ボランティア）挿絵・鐘庭嘉
訳・江愛寶

問

中学に進学したら、部活動に参加しなければなりませんが、自分の興味を考えるのか、将来のことを考えるのか、どう選んだら良いのでしょうか？

答・・凱（仮名）さんは、高校時代にストリート（ヒップホップ）ダンスに夢中になりました。週四日間、夜にインターネットの動画を見ながらダンスの基本動作を学び、暫くして学校のダンスクラブに入ってからは頭角を現し、クラブの部長になりました。

凱さんの両親は、学業への影響を心配して、凱さんがダンスを続けることに強く反対しました。凱さんは、毎回テストの

成績表を両親に見せたことで、安心して同意するようになりました。今は大学生になりましたが、週に半日、母校に戻って後輩たちにダンスを教え、そして、各地のコンテストに連れて行っています。

凱さんは、自分の趣味に合わせて部活動を選び、自分の特性を最大限に引き出しました。しかし、すべての高校生が彼のように幸運かどうかはわかりません。

台湾の教育部（日本の文科省に相当）が、中学校で部活動を奨励している目的は、生徒たちが人間関係を育むことを助け、技能を学んで健全な趣味を磨き、社会に出るための基礎を築くことにありま

す。ですから、部活動は中学生にとって不可欠なものであり、この段階の学習は、自分の興味を主体にしていますが、要は多様な特性を伸ばすことにあるのだと思います。

部活動は社会の縮図

アメリカの作家デル・カーネギーは、「事業の成功において、本人の専門スキルに依存するのはたった十五％だけで、他の八十五％は人間関係と処世法にかかっている」と言いました。

私は中学校の時に、ボーイスカウト部に参加し、素早いテントの設営方法や、薪を使ってご飯を炊く時に焦がさない方法を学びました。また、どのように食材を組み合せれば、よだれが出るほど美味しい料理になるか、チームを率いてコンテストに参加し、第三位になりました。ボーイスカウト部に参加してからは、料理が好きになり、団体の中で人と接することを学び、リーダーシップも培われました。これほど多くのことを学べるとは思っていませんでした。

ある中学校に慈愛社というクラブがあり、メンバーは奉仕活動を通じて、自分のことだけを気遣うのではなく、社会に関心を寄せることを学んでいます。

社会学者のデュルケームは、「教育の目的は、個人を社会の一員にすることにある」と言いました。学校は社会の縮図であり、学生が部活動で計画を立てたり、社会に対する基本的な認識を育んだりすることは重要な一環です。現代は少子化により、子供は皆、親に大切にされています。それが長期的に自己中心的になり、他人を思いやる余裕がなくなります。私の教職経験から述べると、各学校が慈愛社を設立すれば、生徒たちはその中から他者のニーズを理解し、社会へ、更に世界全体へと広がるでしょう。

共通の志と趣味を持つ、気が合う仲間

生徒が自分の好きなことをする時は、健康で、楽しくなります。

文化系部活動は、特定の学問分野や能力の習得において、教科書で教えないような知識を学び、見聞を広め、更には自主的に考える、研究精神を育みます。

スポーツ関係の部活動は、健康な体を作り、積極的で向上心のある生活態度を養います。音楽関係の部活動は、学生の気質を養い、学業のストレスを和らげます。そして、手工芸方面の部活動は、学科以外の趣味を育み、貴重な経験が得ることができます。

以前ギタークラブで、ギターを抱えて弾き語りをしたことを覚えています。

愁いを感じた時は『秋蟬』を歌い、木棉の花が咲き乱れる頃には『木棉道』を歌いました。そのギターは、苦しかった高校生活に寄り添ってくれ、心身ともに楽しく大学に進学することができました。今はもうギターは弾かなくなりましたが、魅力的で美しいフォークソングは、今でも私の心を表現する一番のお気に入りです。

自分の趣味に合わせて部活を選ぶことで、クラブのメンバーと共通の話題ができ易く、チームワークと信頼感を育むことができると共に、人生に美しい光景が生まれ、より良い自分に成れるのです。（慈済月刊七〇四期より）

【證厳法師のお諭し】

菩薩が増えることはこの世の慶事

◎整理・編集部　挿絵・黄逸樵　訳・慈願

毎年の認証授与式は感謝に堪えません。
また一人、慈済人が増えて、社会で愛の力を発揮してくれるからです。
「慈」とは愛であり、「済」とは奉仕を意味します。
世の片隅には必ず苦難に喘ぐ人がいます。
慈済の行動はもっと広めていく必要があります！

一年に一度行われる、海外で研修を受けた委員と慈誠隊員の認証授与式と歳末祝福会ですが、皆さんが遠くから花蓮に来られ、一堂に集まってくれるのは、まさに認証を授かる瞬間のためです。皆さんが人間（じんかん）菩薩になることを発心立願する姿を見ると、この瞬間がどれほど貴重であるかを感じます。私は、委員証と慈誠証を一人ひとりの胸に付けたその刹那、それは私の心に寄り添い、心から皆さんを生生世世、祝福しています。

歳末祝福会で福慧お年玉を手中にする意義は、非常に深いものがあります。それを見れば、私から受け取り、与えられた使命が菩薩道を歩むことだと思い出すでしょう。菩薩道を歩めば、この人生はとても価値のあるものになります。

この世に菩薩が増えるのは、非常に喜ばしい事です。私が喜びを感じるのは、私たちが苦難にある人と接する機会がより多くなった時、あまねくこの世でより広く愛の力を発揮することができるからです。皆さんに期待するのは、恩師の教えである「仏教の為、衆生の為」を引き継ぎ、台湾からこの使命を自分の国に持ち帰って、あまねく世の未来が、幸福と平和になるよう尽くして欲しいのです。

認証を授かるまで数年間の研修を経て、行住坐臥（ぎょうじゅうざが）そして人との接し方、人々と打ち解ける

ことを学んできたと思います。何事をするにも礼儀正しく、静かに話しをするという、慈済人らしさを守らなければなりません。海外から参加する場合、様々な国や地域の人たちが、翻訳機を付けて参加していますから、私は翻訳者の方が聞き取れるように、また正確に翻訳できるように、ゆっくり話しており、参加者が翻訳された話をよく聞き取れたかどうかを観察しています。聞き取れていなければ、心に感じるものはなく、感じるものがなければ感動しません。感じて感動するには、頭と心を的確に使う必要があるのです。

皆さんが認証を授かりに来るために、元気に帰って来るということは、愛と信念の堅さを表しています。何年もベテランボランティアの後ろについて訪問ケアをし、多くの貧困に苦しむ家庭を目の当たりにして、彼らが本当に支援を必要としていることに気づくと同時に、人助けが出来る人は最も幸せを感じ、余力があって人間（じんかん）に福をもたらすことができる人は、幸福だと感じたことでしょう。

近年の気候変動は益々激化し、災害はとても多くなっています。お金さえあれば救済できるのではなく、どれだけお金があっても終わりはありません。最も大事なのは減災で、被害を小さくすることであり、それには愛の心を育まなければいけません。誰の心にも善念はあり、常に人間に福をもたらせば、福の環境が出来上がり、自然と災難を消してくれるのです。

天地には天の気と地の気があり、人間（じんかん）には人の気があります。一つの団体に何人か気性が激しい人がいて、すぐに怒り出すとしたら、この団体は美しい団体と言えるでしょうか。単純な団体だと思いますか。自分の気性を管理し、心を修めて人格を向上させることが修行なのです。気性が穏やかな人は、良い人だと見られますが、気性が激しい人が悪い人とは限らず、直ぐに癇癪を起こす癖を直せばいいのです。修行とはこういうことに過ぎません。

「慈済」があれば、苦を取り除いて楽を与えることができますから、苦難にある人は縁さえあれば、救いが得られるのです。自分には力がないと思うのではなく、皆と力を合わせれば多くの

事ができるのです。人には無限の潜在能力があり、自分を過少評価してはいけません。しかし、傲慢不遜になってもいけません。傲慢は他人との間に障害をもたらします。他人の目障りにならないくらいにまで自分を小さくすれば、目障りにならないばかりか、喜んで受け入れてくれるでしょう。

良い人の気というのは、満たされた愛から生まれます。他人が排除したり、避けて通ったりすることがなく、喜んで近づき、相手の話に耳を傾けます。互いに励まし合い、協力し合う、睦まじい人の気は、世の中を整えて世に平安をもたらします。

皆さんが私を尊重して、慈済に来ていることに感謝します。また、各地のベテランボランティアたちが歩み始めたばかりの菩薩たちに付き添い、自分が長年、どうやって慈済人の役目を果たし、仏の家業を担い、慈済の使命を伝えているのかを分かち合っていることに感謝します。一人ひとりが分かち合う経験は全て法なのです。

「慈済」は二文字ですが、「慈」は愛で、「済」は奉仕を表しており、慈悲で以て天下の衆生を救済するという意味です。慈済は世界中どこで災難が起ころうとも、耳にしたり、目にしたりすれば忍びなく思い、直ちに駆けつけ、無事を問い、何が必要かを尋ねて支援を行います。支援にはさまざまな方法がありますが、人によっては能力と時間があり、喜んで支援活動に参加します。しかし、時間は無くても愛がある人は、人々に資金と労力の提供を呼びかけています。一点一滴が大海に流れ込むようにに、量が増え、充分な資源となったら、災難が起きた場所を支援することができるのです。

これらは私たちが長い間続けてきたことであり、また責任でもあるのです。ですから、毎年の授与式にはとても感謝しています。それは、慈済人が一人増えれば、その分私たちの社会や地域に愛の力が多くなるからです。（慈済月刊七〇九期より）

チマキを作る夏のリサイクルステーション

烏日に達人が集う

いつもは回収したビニール袋やペットボトル、紙類で溢れるリサイクルステーションが、チマキ作りの工房に変わり、烏日区の愛を結集して、より多くの人を助けた！

文・張瑋玲（台中慈済ボランティア）　訳・江愛寶

私のイメージでは、台中烏日九徳リサイクルステーションは、いつも回収したビニール袋や紙類、ペットボトルで溢れていた場所だったが、今年の五月二十日、その考えを見直した。小規模のチマキ工房に変わり、お婆さんやおばさんたちがそこに集まり、まるで、盛大な技能コンテストのようだった。私にとっても、初めて最初から最後まで参加したチマキ作りで、大いに視野を広げた。

午前三時から、ボランティアたちは米を蒸し始めた。厨房で、四つのコンロをフル稼動させ、陳淑惠（チェン・スゥーフウェイ）さんは、フライ返しを手に食材を炒めながら、時々振り返って米を蒸す火加減を確認していた。ようやく暫しの空き時間ができると、彼女が話してくれた。今回は九日間かけて事前に材料を準備し、全部で六千個の粽を作る予定である。それに具材を計量して一つひとつの粽のサイズを均一にするという。彼女は六十人のボランティアチームのお陰で、目標を達成することができたことに感謝した。

リサイクルステーションの予算はずっと自給自足で、毎週六日間リサイクルボランティアに食事を提供し、また弘法して衆生を利することに尽力している。慈済が災害支援行動を開始すると聞くと、人々は力を結集する。マントウをこね、ジャムを作り、被災地に愛を届ける。今度のチマキ作りも同じだ。一部は自ら台中市政府警察署烏日分局及び各交番に届け、警官の苦労を労い、感謝の意を示す。

九徳リサイクルステーションの正門から入ったところは、梱包と出荷エリアで、左側に蒸し器があって、チマキ蒸しに使われる。奥に進むと、具材の充填エリア、

チマキ包みエリア、蒸したもち米の置き場及び厨房があり、裏庭には更に六つのコンロがあり、米と粽を蒸すことができる。脇にある排水溝の上は、洗米する区域である。リサイクルステーションのあらゆる空間を最大限に活用して、作業の効率をよくしている。

スムーズな作業の流れは、慈済ボランティアの蔡玉雪（ツァイ・ユーシュエ）さんの設計によるものだ。リサイクルス

烏日九徳リサイクルステーションの空間を多元的に活用し、60人のボランティアが器用な手で、心を込めて作業した結果、1日で6千個の粽を作ることができた。（撮影・許順興）

テーションが狭いため、普段から彼女は、リサイクル品を拠点内で上手に活用している。例えば、排水溝の上に鉄製のフレームを固定して、ブルーシートの日よけを設置し、強い日差しを遮ることで、ボランティアたちの活動スペースを広げた。「元々はコンロが四つでしたが、今は十二個が同時にもち米と具材を蒸すことができます。これは皆の協力があってこそできることです。三人寄れば文殊の知恵です」。

集まった良き隣人は誰もがチマキ作りの達人だ。陳奕廷（チェン・イーティン）さんは、テキパキとしていて、あっという間にきれいでしっかり結ばれた一房のチマキが出来上がった。彼女の義父は、昔チマキを売っていて、一日に二百個のチマキを作っていたそうで、その熟練した腕前をここで発揮した。

隣の八十歳を超えたお爺さんは、早朝から皆が忙しくしている様子を見て、急いで妻にも参加するように言った。彼は、妻の作ったチマキはとても美味しいので、それで、妻の都合に関わらず、手伝うよう急かしたのだ、と言った。

四年前、私は初めて九徳リサイクルステーションのベジタリアンチマキを注文した。両親と家族がその味を気に入り、それ以来、毎年予約するようになった。今年私は二束予約し、写真を撮ってSNSで共有したところ、多くの友人からどうすれば買えるのかと尋ねられた。山登りの時にもチマキを持って行き、山の仲間と分かち合ったところ、同じように喜ばれた。私は照れくさくなって彼らに、「愛心チマキは予約しないと買えないし、生産量に限りがあるので、来年は早めに予約してください！」と言った。

私は、洪素養（ホン・スゥーヤン）師姉に誘われて、人文真善美（記録）ボランティアチームに参加し、活動をどう記録するかを学んだが、チマキ作りの細部に注意を払い、一つ一つのチマキが完成するまでの複雑さと心遣いを理解した。チマキを食べた瞬間、感謝の気持でいっぱいになった。

今回の活動で、合心・和気・互愛・協力の四つの行動理念を持っていることで、本当に多くの不可能な任務を完遂できたのだと深く感じた。仕事が終わった後も、多くの人が残って調理器具を片付けたり、環境を掃除したりしていた。疲れた一日だったにも関わらず、皆笑顔に溢れていたことに感動した。来年もまた、一緒に参加できることを楽しみにしている。（慈済月刊七〇四期より）

胃思修

素晴らしい菜食生活

文、撮影・懿旖（慈済ボランティア）　訳・江愛寶

元々料理が好きではなかったが、菜食するようになってから調理を学び始めた。色とりどりの野菜は、私に美的感覚による創作の道を切り開いてくれた。子供が学校に持っていくキャラ弁は、いつもクラスで注目を集めた。穀物と野菜と果物は、綺麗で爽やかで、もっと大事なのは、これ以上、私のために命を落として食べ物になる動物がいないという点である。

小さい頃、私はルーローファンを食べるのが好きだった。誰も私にルーローはどのように作られるのか教えてくれなかったし、細かく砕いた肉そぼろはご飯と混ぜると、素早く喉を通った。野菜をまだうまく咀嚼することができなかった頃の私は、小さな歯で長い野菜の葉を噛み切ることができず、時折、それを喉に詰まらせてしまい、飲み込むことも吐き出すこともできなかったため、顔が真っ赤になるほどむせた。また、私は魚を食べるのが好きで、おもちゃが少なかった時代、いつも家族に、魚の目玉を残してくれるよう頼み、ビー玉として遊んでいた。

中学の頃、夜の自習の前にクラスメートがルーウェイ（台湾風煮込み）を買ってきて一緒に食べた。私は細長く切られた豚

の耳を指でつまんで口に入れ、噛みながら自分の耳を触ったことがある。その軟骨の触感は、上唇と歯の間の軟骨と何の違いもなかった。それが初めて肉食をしている自分を残酷だと思った時だった。

大きくなってから、私は生のままの料理、或いは、丸ごとの蟹や伊勢海老、魚は決して食べなくなった。動物が死んだ姿は見るのが堪えなかったのだ。それでも自分の心をごまかして、「見なければいい」と思っていた。

外国の或るドッキリ番組で、番組制作部門が売り場でブースを設け、客に「作り立て」ソーセージの試食を提供し、客が購入を希望したら、オーナーは生きた子豚を抱き上げ、仕掛けのある箱に入れ、箱の横のハンドルを回すと、反対側の穴からソーセージが出て来る、という具合だった。客からは、まるで子豚が箱の中で、生きたままミンチにされてソーセージが作られているように見えた。反応は皆、目を大きく見開いて恐怖に満ちていた。気分が悪くて吐き気を催す人もいれば、オーナーに子豚を箱に入れるのを止めようとする人もいた。

人は誰でも本来慈悲心を持っている。この実験では、誰もが生きている動物が命を失うのは見たくないが、人は皆血腥い殺生の場面さえ見ず、死ぬ前の悲鳴さえ聞こえなければ、動物の命を犠牲にして食欲を満たし続けるのである。

たとえ私が小さな水滴だとしても

私は菜食すると決めたのは、十四年前の東日本大震災の時だった。ニュースで津波が町を襲い、海面が燃え上がる映像を見て、私はこの、まるで世界の終末を描いた映画のような災害が現実だとは信じられなかった。被害の映像が次々と配信されるにつれ、私の心もどんどん重くなっていった。

「母なる地球が病気になった！」。私は被災者の涙と取り乱す様子に同情を禁

じ得なかった。また、地球のために何ができるだろうかと、心の中で考えていた。当時の私は、大愛テレビ番組『心の講座』に啓発されていて、牧畜業から排出される二酸化炭素が環境に悪影響を及ぼしていることを知り、陸上に生息する動物を食べないことにした。東日本大震災後、福島の原子力発電所から放射能に汚染された水が海に流れ出たことを知って、環境保護と健康、更に地球を大切にするために、私は毅然と魚介類を食べないことにし、その日から菜食主義者になった。

菜食天国と言える台湾に住んでいる私たちは、自分がなぜ菜食するのか分かっていれば、食べ物を選ぶのは全く難しくない。元々料理が好きでなかった私が、各種の調理方法を学び始めた。色とりどりの野菜も私に美的感覚による創作の道を切り開いてくれた。子供が学校に持っていくキャラ弁は、常にクラスで注目を集め、褒め称えられ、菜食を食べたいというまでになった。家族も、家では私と一緒に菜食をするようになったことで、明らかに体調の変化を感じていたそうだ。健康診断の報告書でも、体重、血圧、コレステロールの数値が異常値を示す赤字から正常値を示す青字に変わっていたのである。

世界の人口は八十一億人を数え、毎日食事を提供するために、二億一千万匹超の家畜が食肉処理されている。しかも、この数字には水中生物は含まれていない。統計によると、一人一日三食とも菜食した場合、少なくとも二キログラムの二酸化炭素排出量を削減することができる。菜食を初めて五千日余りの私一人で、ほぼ一万二千キログラムの二酸化炭素排出量を削減したことになり、それは、八十本のクスノキの炭素貯蔵量に相当する。

三月十一日は震災の日だが、私にとっては飲食習慣に目覚めた日でもある。地

球のために起こす小さな行動も軽く見てはいけないと、この日が思い出させてくれるからだ。私の飲食習慣の選択が、この地球環境にとってはただの小さな一滴の水だとしても、私はその小さな水滴で、傷ついた大地を潤したいのだ。

人間も動物も血が通っている

食習慣は変えることができる。今すぐ完全に菜食することができなくても、野菜を増やして、肉を減らすのもいい。体にとっても、環境にとっても、いいことだらけである。一食の菜食は一つの善念である。地球を愛するなら、食卓から始めよう。

菜食主義者になってから、最大の変化は「食べ物」を違う視点で見るようになったことだ。私が口の中に入れる食べ物は太陽、空気、水で灌漑された野菜や果物を選び、健康的で爽やかで体に負担がかからないものであり、もう、命が終わる前の悲しみと重い魂が付着した、調味料を加えて調理された血まみれの肉ではないのだ。目を閉じると、彼らの生前の飛び跳ねる様子さえ想像できる。懺悔と慈悲が心の中で交わりながら成長している。（慈済月刊七〇二期より）

グローバル慈善

インドネシア眼科施療

百人の白内障患者に新たな視野が開けた

文・アリマミ・スリョ・アー（慈済インドネシア支部スタッフ）訳・施燕芬

白内障手術の翌日の再診は、いつも驚きと喜びに満ちている。看護師がそっとガーゼを外し、患者がゆっくりと目を開く。世界がパッと開け、再び取り戻した光明は、視力だけでなく人生そのものだ。

四十一歳のスラメット・ブディオノさんは、警備員として働き、二人の子どもの父親である。彼は二〇二三年から右目が徐々にかすみ始めた。最初は異物が入った感じだけだったが、最終的には光と影を見分けることしかできなくなった。「歩いている時、平らな道だと思っても、よく物につまずいていました」。

白内障は彼の仕事にも影響を及ぼし

た。「会社は契約を更新してくれないかもしれません。私のような年齢では、新たに仕事を見つけるのは容易ではありません。早く治療を受けたいのですが、自分で貯金するしかありませんから、手術を受けられる日がいつになるのか、見当もつきません」。

ついに慈済で施療を受けるチャンスが訪れた。しかし、「もし失敗したらどうしよう？かえって失明してしまうのでは？」人生初めての手術だったため、喜びの中にも不安を抱いていた。彼は他の患者たちと一緒に手術を待ちながら、「最初は皆、知らない同士でしたが、お互いに励まし合ったりして、やがて新しい家族や友人のようになりました」と言った。

翌日の再診で右目のガーゼが外された瞬間、彼は、「以前は光しか感じませんでしたが、今は人の姿が見えるようになりました。鍵穴に間違いなく鍵を差し込めますし、安心して歩けるようになりました」と喜びと共に語った。

次々と患者が視力を取り戻すのを見て、眼科専門医のトリ・アグス・ハルヨノ医師は、「目が見えなかった人が、再び視力を取り戻す姿を見るのは、医師として最大の喜びです」と語った。

今年七月十九日から二十日にかけて、インドネシア・スラバヤのブラウィジャヤ軍病院で、慈済ボランティアはブラウィジャヤ第五軍区と協力して眼科の施療を行い、スラバヤ、シドアルジョ県、グレシック県、バンカラン県などの場所から患者が来た。これは慈済インドネシア支部が催した百四十九回目の大規模施療で、百四十二人の白内障患者と十九人の翼状片患者に無料の手術を施した。

一人が視力を取り戻すと家族全員に希望が持てる

四十七歳のスパルランさんは、かつては建設労働者として働いていたが、両目に白内障を患ってから失業し、すでに三年が経っている。彼が最も心配しているのは、前妻と子どもに生活費を送れなくなることである。

日常生活でいつも「壁」にぶつかり、鼻血を出すほど顔をよくぶつけていた。「ある時、母をバイクに乗せていたら、危うく柵にぶつかりそうになりました。それ以来、バイクに乗るのが怖くなり、自転車に替えましたが、それでも結果は同じで、最後には歩くことにしました」。

「もちろん良くなりたいと思いますが、

「指が何本見えますか」。術後の再診で、医療スタッフがブディオノさんの視力の回復状況を確認していた。（撮影・アリマミ・スリョ・アー）

経済的な事情があるのです」と語った彼は、施療に二度申し込んだものの、戸籍の問題で手術を受けられなかった、と言った。七月十二日、彼は姉のカセリンさんに付き添われて、慈済の術前検査会場にやってきた。そして、検査に合格しない人がたくさんいるのを見た二人は、とても不安になった。しかし、彼らは「慈済に感謝しています。朝から晩まで待っていましたが、空腹や喉の渇きを感じたことはありません。ボランティアの方々は優しくて、『まだ食べていない人はいませんか』とあちこちで声をかけてくれて、本当に親切でした」と言った。

医療スタッフがスパルランさんの名前を呼び、検査合格を示す黄色いカードが渡された時、カセリンさんは感動のあまり涙がこぼれそうになった。「弟がやっと手術を受けられるのです。家族の希望を託せる場所が見つかりました。そして、弟が回復して再び働けるようになり、子どもや家族を養えるように回復して欲しいです」。

七月十九日に手術を終えた後、スパルランさんの視力はまだぼやけていて、足元もおぼつかなかったが、顔には隠しきれない喜びが溢れていた。「ボランティアや医師は、皆本当に心を尽くしてくれました。私の他にも多くの患者を助けていました。本当に感謝しています」。しかし手術前に外した眼鏡は、すべての施療日程が終わっても見つからなかった、と彼が笑いながら言った。

一番驚いたのは、翌日の術後に検査をした時だった。看護師がそっと右目のガーゼを外し、丁寧に眼を清潔にしてくれた後、スパルランさんがゆっくりと目を開けると、目の前の世界が一気に広がったのである。「とても明るい！失くした眼鏡は見つかりませんでしたが、もう必要ないと思います。見えるようになったのですから」。

一回の手術で、人生の後半が変わった

六十三歳のレティさんは、左目が白内障になって以来、景色は暗くしか見えず、照明の灯りは花火のように眩しく見えた。マッサージ師である彼女は、訪れる客を見分けることさえできなかった。

トラック運転手である四十六歳のアフマッド・ハフィトさんは、左目に白内障を患い、右目だけに頼って働いてきた。しかし、特に左折する時に不安を感じていて、よく後方からクラクションを鳴らされてはびっくりしていた。

スパルランさん（右）は、7月12日の術前検査に訪れ、手術で視力が回復してほしいと期待した。（撮影・ドク）

視力に頼って生計を立てている彼らにとって、施療がいかに貴重な機会であるかは、生活の糧を得る能力を保つことからわかる。第五軍区司令官ルディ・サラディン少将は、白内障は小さな病気ではなく、患者の生活の質や仕事の能力、さらに社会的な交流にも大きな影響を及ぼす、と言った。また「眼科手術によって、直接恩恵を受けた人の暮らしは改善され、自立した自由な行動も取り戻せるのです。慈済という協力パートナーに心から感謝しています」。

慈済スラバヤ連絡処の責任者である范暁慧（ファン・シァオフェイ）さんは、今回のブラウィジャヤ軍区との協力は二度目だと言った。「軍病院全体を開放して、手術室を含めて私たちに使用させてくれたことに感謝しています」。

これほど多くの人が施療に来たのを見て、范さんの心には喜びと悲しみが入り混じる複雑な気持ちだった。「慈済が、こんなに多くの人に光明を取り戻していることは嬉しいのですが、東ジャワ全体にはまだ支援を待っている白内障患者が数多くいることを思うと、心苦しくなります。スラバヤ慈済がさらにパートナーを得て支援体制を整え、もっと多くの施療が行われることを願っています」。

今回、ジャカルタから七人のボランティアが飛行機でスラバヤへ駆けつけ、現地の慈済人医会チームと共に奉仕した。施療の責任者である陳柚霖（チェン・ユーリン）さんは、嬉しそうにこう言った。「皆さんが苦労を厭わず、積極的に支援し、惜しみなく知識を分ち合ってくれたことに感謝しています。手術が成功した患者さんの姿を見ると、私は胸が熱くなりました」。

（慈済月刊七〇六期より）

（出典・非営利組織フレッド・ホウルズ基金会のウェブサイト）

慈済インドネシアの施療活動

- 1995年タンゲラン衛生局と協力し、結核患者に栄養食品と薬品を提供。
- 1999年初めて大規模な施療活動を実施、診療科目を増やし、サービス地域を拡大。
- 2002年11月10日インドネシア慈済人医会が設立され、定期的な施療と災害時の医療活動に投入。
- 23年間に行った大小の施療により、延べ**29万**人以上が恩恵を受けた。

第149回の施療

日程： 2025年7月19日～20日

場所： スラバヤ市ブラウィジャヤ軍病院

受益者：161人

- 4つの県と市から受診に来た患者は、屋外での労働者が多く、紫外線や砂塵の多い環境で白内障や翼状片の罹患率が高くなっていた。
- インドネシアには約360万人の失明者が存在し、その中の約70%が白内障によるものだ。
- 失明者のうち、43%は手術費用が負担できず、25%は治療可能であることを知らないか、また、恐怖心や付き添いがいないなど、数々の原因で受診していなかった。
- 眼科の医療資源は都市部に集中し、農村部や僻地では受診困難。

この手で
大地を守る

マレーシア

文・江欣燕、賴韶璋、陳庥禎、陳曉燕、陳思妤、謝蕙仙、林愛明、
蔡美清（セランゴール慈済ボランティア）訳・江愛寶

グリーンアクション体験型展示会

明日の地球を守る 今こそ行動を

クアラルンプール静思堂では、全長十一メートルの巨大クジラが堂々と頭をもたげて来場者を出迎え、一万本を超えるペットボトルで作られた「尽きない欲望」と題したトンネルがある。

この「グリーンアクション体験型展示会」は、来年の二月まで開催されている。回収資源で作られた創意あふれる世界において、来場者は観客ではなく、地球の明日を左右する〝主役〟なのである！

広大な海の中で、クジラは巨大な体と悠然と泳ぎ回る姿で独特の魅力を現わしている。また、クジラは海洋生態系のバランスを保つ上で、非常に重要な役割を担っている。近頃、クアラルンプール静思堂志業パークには、一頭の青く輝く「巨大クジラ」が現れた。

今年八月二十四日、六カ月にわたる「グリーンアクション体験型展示会」がクアラルンプール静思堂で幕を開けた。十のテーマがマルチメディアやインタラクティブ・インスタレーション

（撮影・黄勇雄）

「クジラの叫び」はほとんど再生素材で作られており、クアラルンプール静思堂の「協力広場」前の台に横たわっているので、人目を惹くと共に、海洋生態系のバランス維持におけるクジラの重要性も訴えている。

マレーシア
慈済基金会ＦＢ

と芸術作品を組み合わせて表現されている。六百人の来場者には、市議会の役人、社会の有識者、国々の大使、教育界の代表とメディアなどが含まれており、共に数カ月にわたって準備した盛大なイベントを見届けた。

「クジラの叫び」という展示品は、グリーンアクション体験型展示会を代表す

る展示品の一つである。クジラは、地球に存在する巨大炭素貯蔵装置と言えるが、それは、彼らの排泄物が海の浮遊植物の成長を助け、これらの小さな植物が光合成によって二酸化炭素を吸収し、それらが枯れると二酸化炭素は海の深層に沈み、長い間保存されるからだ。科学者によると、浮遊植物が吸収する二酸化炭素の量は、アマゾンの熱帯雨林に匹敵するそうだ。

しかし、この全長十一メートルのクジラを陸上に上げるために、クラン市のボランティアチームは、相当な努力を費やした。穴を開け、溶接した鉄の棒で骨組みを作り、魚の形に組み立てた。回収した八十七万六千個の飲料用紙パックの内層のアルミホイルでクジラの外皮を作り、その上からクランバレー州で集めた二千本余りのペットボトルを縛って、イルミネーションを取り付けた。夜になってもキラキラと明るく閃いて訪れる人々を魅了した。

体験型展示会主任コーディネーターの黄時常（フウォン・スーツォン）さんは、「宣伝力を強化するために、今回の展示品は大きくて力強いものにしました。一人の作業で完成させるのではなく、ボランティアチームの力を結集することで『衆心城を成す』のです！」と言った。

リサイクルボランティアは生涯現役

一九九〇年八月、台湾の慈済ボランティアは、「拍手する両手で環境保全」を始めた。一九九五年、マレーシア・クアラルンプールボランティアの鄧淑蓮（ドン・スウーリェン）さんは、慈済マラッカ連絡所の配付活動に参加した時、看板に「ポイ捨て禁止」と書いてあるのを目にした時に、人を集めて、リサイクル活動をすることにした。

「始めた当初は恥ずかしかったので、こっそりとやっていました。誰かが回収物を持ってくるわけではなく、私たちは夜の九時に店が閉店した後、門の前に置かれたゴミから、紙類、アルミや鉄の缶を探しました」。しかし、呼応する住民が次第に多くなり、彼女の小さい車では回収物が積みきれなくなったため、彼女は大型トラックの運転免許を取得した。ボランティアたちも決められた目立つ場所を緊急に捜すことを迫られ、大衆がそこに資源を持ち込むと同時に、資源の分別を学ぶよう呼びかけた。この三十年間で、セランゴール地区には十六の環境保全教育ステーションと九十五のリサイクルステーション、三百四十二の回収拠点

グリーンアクション体験型展示会が開催された当日、116人の高齢リサイクルボランティアが手話を披露した。梁静珍さん（右）と王峇世さん（左）は環境保全に10年余り取り組んできた。（撮影・蔡夢萍）

ができた。

今回のグリーンアクション体験型展示会は、特別に二つの賞を設け、環境保全の推進に卓越した成果を出した団体を表彰している。「グリーンキャンパス賞」を受賞した益智中国語小学校は、二〇一九年から慈済ボランティアの呼びかけの下に、教師と親と子供の三者が環境保全運動を始め、校内では全面的に使い捨て食器を禁止した。

「最優秀人気賞」は慈済増江リサイクルステーションに授与された。十七年前に、全マレーシアで最大の華人が住んでいた増江新村に開設したリサイクルステーションであり、セランゴール慈済初めての「惜福屋」だが、今では高齢者向けの活動を多く行っている。二〇二四年から今年の七月まで、合計三十二回の視察団を受け入れ、訪問者数が延べ千七百人を超えた。

開催当日、もっとも感動な場面は、百十六人の年齢六十五歳から八十八歳までのリサイクルボランティアが、国際会議ホールのステージに立って、「皆で環境保全をする」という慈済手話曲を披露した。その活力に満ちた表現により、皆で環境保全をして、心と地球を救うことを呼び掛けた。

蟻の行列はあらゆる人を必要としている

グリーンアクション体験型展示会の開催は、二〇二六年二月二十八日までである。展示エリアの入口にあるアーチは、

二千匹の蟻を積み重ねたもので、一つひとつの蟻は、ボランティアが回収した包装用ＰＰバンドで編んだもので、「蟻の行列」のチームワーク精神を象徴している。アーチをくぐると、見学ルートは「因」から「果」に向かい、そして、「仏法」へと導かれていく。

一つ目の「因」では、一万本を超える五百ミリリットルのペットボトルで作られた「尽きない欲望」トンネルに入り、ネットショッピングの品物が山積みされ、マネキンが数え切れないほどの服を着て、プラスチックごみがポイ捨てされている状況は、現代の人々の生活を映し出している。

過度の消費という「因」が四大不調という「果」をもたらしている。地震や水害による惨状、火災による熱、風災によ

来賓が１万本のペットボトルで作られた「尽きない欲望」トンネルに入り、消費行動による影響に見入っていた。（撮影・李偉建）

開催の前、ボランティアたちは皆で、知恵を絞り、力を合わせた。蟻の行列精神を以て、PP小蟻の展示物を作っていた。（撮影・鄧亦絢）

る強風とその破壊力という四大不調の体験である。十分間で、特色ある音響と照明の演出効果によって恐怖を感じると同時に、深く考えさせられるのだ。極端な気候による災害は益々酷くなっているが、それは人類が自然を過度に消耗した結果である。

最後は「仏法」が希望をもたらしてくれるエリアである。環境保全における十の合言葉を表す展示品は、ごみの山、緑地、海洋で構築され、来場者が資源を手に取って正しい回収ボックスに入れると、ごみの山が裂けて緑地と海洋が現れる仕組みである。

開催前のことだが、リサイクルボランティアが総動員で、大量のペットボトル、プラスチックボトル、アルミ缶、厚紙の回収を手伝った。熱心な民衆とメーカーは材料を寄付してくれたし、自分の作業場と器材を貸してくれた人もいた。志のある人が無私の奉仕をすることで、人々の参加を促し、多くの地域住民も展示物の創作に加わった。

開催までの過程を振り返ると、プチョンコミュニティ環境保全担当者の郭修成（グォ・シュウツン）さんも、「合和互協」の力を感じ取った。作成から美術関係まで、デザインから組み立てまで、みんながそれぞれの才能を発揮した。誰もが欠けてはならないパズルのピースなのだ。「善行にあなた一人が欠けてもいけない。一人で大きなことは成し遂げられない。私たちは拍手する手で環境保全をし、世界を明るくしよう！」。

単なる展示会ではない警鐘なのだ

大きな「白菜」と「肉」はとてもリ

アルで、多くの人が足を止め、ボランティアが、低炭素飲食が如何にして地球への負荷を減らすかという説明に聞き入った。

ヌグリ・スンビラン州群英語中国語小学校の梁敬迎（リャン・ジンヤン）副校長は、去年初めて生徒を率いて静思堂を訪れた時、慈済の物語に震憾し、感動した、と言った。今回、迷わずグリーンアクション体験型展示会を修学旅行のスケジュールに組み込んだ。地球温暖化の警告を見て、はっと気づき、證厳法師が常に言っている「間に合わない」という切迫感を感じ、環境保全教育は幼少期からすべきだ、と思った。

展示エリアの中央には巨大な「気候時計」が吊るされており、カウントダウンの秒針が刻々と進む音で、人類によって地球に残された時間は三年しかないことへの注意を喚起している。招かれた市議会役人のシャキナさんは気候時計の前で長く考え込み、ゆっくりとこう言った。「全ての生物と共に地球で生きている私たちは、怖くなって心配になるはずです。もし環境悪化が続けば、気温が摂氏一・五度上昇すると、人類は深刻な境遇に直面します。現在すでに異常な暑さを感じていますから、この展示会は、実は警鐘なのです」。

画面に「未来の子供からの手紙」が映し出された。そこには、二〇五五年から来た子供の姿があり、人々が緑の地球を守り続けてくれたことに感謝していた。しかし、実を言うとその手紙は、「今こそ人類が地球のために実行に移す時だ」という期待を託したものである。というのは、今日の考えや行動が明日の世界を創造するのだから！

（慈済月刊七〇七期より）

低炭素飲食エリアで、子供が両手で人参の模型に触ると、画面に營養素及びカロリーが示された。（撮影・蔡夢萍）

心配を敬虔な心に変える

変動する環境の中で自分の心を落ち着かせ、無常の人間（じんかん）で力を尽くす。

◎文・釋徳仉／訳・済運

光復郷での支援に感謝

九月二十七日、慈善志業の劉効成（リュウ・シァオツン）副執行長が上人に、光復郷での清掃と慰問活動の動員状況を報告しました。瑞穂静思堂と慈済キッチンカーが炊き出しを続けたことの他、自発的にキッチンカーを出して、光復郷で食事を提供した商店があったことを述べました。上人は、「これらの商店は皆、『愛心商店』です。キッチンカーであれ、店舗であれ、人々が愛を発揮しに来ているからには、慈済も彼らに感謝の意を表さなければなりません」と言いました。「世に災害が起きた時、私たちはそれを自分の責任と見なすべきです。清掃に参加してくれた人も、食事を提供しに来た愛心商店も、駆けつけた人たちは皆、私たちの支援に来てくれたと考えるべきです。」

劉副執行長は、「大衆がボランティアとして参加してくれた他、企業がスポーツドリンクや清掃用具を、製薬会社が医薬品を寄付してくれましたので、その全てに対して、感謝状を贈りました」と言いました。上人は、「一連の表を作成して参加した個人と組織、団体をしっかりと記録し、縁結びの品や感謝状を贈るか、または今後、各地区のボランティアが感謝の意を伝えなければなりません。慈済は花蓮では『地主チーム』であり、そうした気持ちで各方面の人々に接する必要があります」と開示しました。

「私たちは花蓮で、人々の便宜に対応する必要があります。また、企業の中には、従業員が自主的に休暇を取ってボランティアに来ていた所もあるのですから、私たちは彼らの経営者に感謝を伝えなければなりません」。参加した人々に対して、上人は、今回の奉仕の価値を記念して感じてもらうために、携帯しやすい縁結びの品をデザインすることを提案しました。歌や文字で感謝を表すことで、彼

らに印象を深めてもらえれば、一生の記念となるでしょう。

志業体職員が直ちに奉仕

「静思法脈を継承し、慈済宗門を広める」と題した志業体の精進勉強会が開催され、職員たちは九月二十八日に精舎に戻り、二十七日に行なった光復郷の被災地での清掃活動に関する感想を、上人と共有しました。

上人はこう開示しました。「人は皆幸福な人生を望みますが、この世の人生には生老病死の苦しみがあります。そして、人生は無常であり、赤ちゃんから子供、青年、中年、老年、死に至るまで、体は常に変化しています。世の有形のものも成住壊空（じょうじゅうえくう）という無常の変化の中にあり、人の心も生住異滅（しょうじゅういめつ）という姿の変化に従うのです。生理的、物理的、心理的にすべてが無常の中で変化していますが、どんな境遇に直面しても、先ず自分の心を安住させることが必要なのです」。

光復郷の被災地清掃に来た多くの青年ボランティアに、常住師父は、縁結びの品として、しおりやストラップなどを贈呈した。（9月27日）

「世の四大不調も、病的なほどになっています。今回のせき止め湖からの水による災害も、地球が病んだ故の気候の不順によるものです。人は誰でも地球に依存して生きているのですから、心して地球の生態に配慮する必要があります。重大な公共事業は政府の力に頼る必要はありますが、大衆も自分の力を使って地球環境を守ることはできます。あなたたちが被災地に行って清掃を行うのも、その一環です」。

「皆さんが今回、花蓮に戻ってきて精進していることに感謝します。法脈と宗門の精神を起点にしてどのように投入したのかを話してくれました。ですが、この

ようにせき止め湖の溢流・決壊のニュースに遭遇したことは、学びを得る機会だったとも言えます。皆さんは花蓮に集まり、臨機応変に対応し、志を同じくしていました。呼びかけただけで多くの人が応じ、光復郷に向かってくれました」。

「昨日、大愛テレビで見ましたが、四大志業の管理職及び職員たちが奉仕しているだけでなく、隊列はとても整然としており、台湾全土の慈済人に加えて、多くの社会各方面の人や大衆も参加してくれていました。長年の慈善活動のおかげで、慈済人には暗黙の了解があり、秩序のある行動が取れました。政府が慈済を信頼し、ボランティアに来てくれた人の登録と指導を委託してくれたことに感謝します。本当に責任は重く、大きなプレッシャーを感じましたが、幸いにもスムーズに作業を進めることができました。何をすればよいかを人々に教えようとして、慈済人が身を以て模範を示したことは、良能を発揮したと言えるでしょう。先ほど被災地とのオンライン映像を見ましたが、清掃した後の道は、とてもきれいでした。これは昨日皆さんが努力した成果です。もちろん、まだ広い範囲で清掃を必要としています」。

「この災害が過ぎた後、皆さんは一層警戒心を高め、自分を戒めて敬虔になり、菜食を推進しなければなりません。さもなければ、衆生の業力はあまりにも重く、これから何が起きるか分かりません。災害を防ぐことはできませんから、非常に心配ではありますが、心配する気持ちを敬虔な心に変え、菜食をして斎戒し、同時に、立願するのです。ここ二、三年の間、私はずっとこのことを話してきました」。

上人の言葉は続きます。

「衆生の業力は欲望から来たものであり、欲望を満たすために追い求め、争った結果ですが、欲望は尽きることがなく、口の欲求のために大量に動物を飼育し、屠殺しています。人口が増え続け、殺業（せつごう）がますます重くなって衆生の共業（ごうぐう）となり、地球上の災害を引き起こしているのです。従って、一方でできるだけ口の欲を抑え、もう一方で、人々は敬虔にならなければなりません。発心立願して虔誠に祈るのです。その敬虔な心の声は、天に届くでしょう。職員の皆さんには、各地の職場に戻ったならば、今回の光復郷でのボランティア体験による見聞と感想を、どうぞ多くの人と共有してください。（慈済月刊七〇八期より）

慈済の出来事 11/22 — 12/22

◎訳・済運

台湾 Taiwan

●花蓮馬太鞍溪せき止め湖溢流災害に対して、慈済人医会は災害後の心理衛生と医療支援プロジェクトを展開した。11月22日から2026年2月8日まで、毎週末、光復郷で心身医学、整形外科、中医などの施療を行うと共に、往診も行うことで、光復郷の長期的な復旧に寄り添う。

●大愛劇場《在光裏的人》に出演した杜蕾さんが、アジアテレビ大賞のドラマ部門で助演女優賞を獲得した。そして、「ニューヨークテレビ大賞」の最優秀女優賞に名前が上がり、「アジアTVコンテンツアウォード」の助演女優賞にノミネートされ、また「金鐘奬」（ゴールデンアウォード）のドラマ部門で最も潜在力を持つ新人賞に輝いた。（11月29日）

ネパール Nepal

●慈済はネパールのフォーワード基金会と協力して、コシ州・スンサリ郡の貧しい低カースト世帯のために支援建設した100戸の大愛住宅が完成し、入居が始まると同時に入居者に米と食用油、家屋所有権状を届けた。この案件は慈済が出資し、当基金会が建設すると共に、村人に伝統的な工法を用いた建築技術を教えた。鉄筋の代わりに竹で編んだ構造で、その上にコンクリートを塗ったものである。一戸当たり2部屋と居間、屋外のトイレがあり、室内面積は12・25坪である。建設日数は短く、将来、住民自身が修理維持することができる。（11月25日）

インドネシア Indonesia

●マラッカ海峡では滅多にない熱帯低気圧「セニャール」が発生し、極端な雨量がスマトラ島北部の3つの省に洪水被害と甚大な土砂災害をもたらした。慈済は大規模な災害支援を展開すると共に、軍と協力して交通が遮断された甚大被災地に物資を届けた。支援は13の県と市にわたり、公共の厨房と避難所の設置と、施療、炊き出しと共に、米や医薬品、毛布、清掃用具などを延べ47、000人余りに提供し、また2、500戸の恒久住宅の支援建設を

計画している。（11月27日～12月22日）

スリランカ　Sri Lanka

●11月27日、サイクロン「ディトワ」が来襲し、20年来の重大な天災となった。10万棟の家屋が損壊し、170万人が影響を受けた。慈済はハンバントタで1、800人分の炊き出しを行い、首都のコロンボでは弱い立場の被災世帯の清掃を手伝い、ホマガマ地区で1、438世帯に1・5カ月分の食糧と生活用品を贈呈した。2026年初めからはコロンボと中央地区で20、000人余りを対象に大規模な配付を行う予定である。（11月28日～12月14日）

タイ　Thailand

●北東モンスーンによる異常な豪雨で、11月26日～27日に南部の10県に被害をもたらし、300万人余りが被災した。慈済タイ支部は12月1日と2日に物資の梱包を行うと同時に、ソンクラー県を訪ね、物資が不足しているチャナ郡を視察した。そして3日と4日に医薬品、生活用品、清掃用具を3、000世帯に配付した。

フィリピン　Philippines

●台風25号（カルマエギ）被害に対する14回の配付活動が、マンダウェ市とタリサイ市、コンポステラ町、コンソラシオン町、リロアン町、ダナオ市で行われた。6、562世帯に生活用品と25キロの米が配付され、そのうちの家屋が全壊した1、000世帯が祝福金を受け取った。活動には各地から集まった400人近いボランティアが医療ステーションを設置し、300人が施療の診察を受けた。（11月28日～29日）

●当国中部は、カンラオン火山の爆発と地震、台風25号による3つの災害に続けて襲われた上に、11月25日には台風27号（コト）によって水害が起き、インフラと住宅が一層激しく損壊した。慈済はバコロド市、バゴ市、カンラオン市、ラカステラナ町の4カ所で2、000世帯を対象に、米と日用品及び

建材購入券を配付した。（12月14日～16日）

パキスタン　Pakistan

●8月、北西部では雨季の雨によって洪水と土砂災害が起き、1、000人余りが亡くなったが、一部の被災地は11月になっても復旧していなかった。慈済基金会は2022年に続いて再び現地の機構と協力して、7、500世帯の52、500人を支援した。

●慈済基金会本部は6、000セットの物資をウィーケア基金会とアルマディナイスラム教研究センターに委託して、11月29日までにカイバル・パクトゥンクワ州で配付を終えた。

●1、500セットの食糧パックと生活用品に関する購入作業をシルカット・ガー女性資源センター（女権擁護組織）に委託し、12月16日までにパンジャブ州で配付を終えた。

香港　Hong Kong

●11月26日、新界大埔宏福苑団地で、この70余年で最も大きな火災が発生した。慈済香港支部は直ちにボランティアを動員して慰問し、12月6日から被災世帯に慰問金を届けた。12月19日の統計では既に1、800世帯余りに配付された。

インド　India

●カピラヴァストゥ大愛村が起工した。場所はシッダールタ王子が過ごした王宮跡地から僅か3・7キロしか離れていない。慈済は2023年から関心を寄せ、150戸の住宅と幼稚園、マーケット、社会教育及び活動センターの建設を計画している。13の国と地域から来た194名の法師たちと、100人のシンガポール、マレーシア、台湾からの慈済ボランティア、カピラヴァストゥの住民たちが式典に出席した。（12月18日）

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路８号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989000
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ　Vancouver
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
携帯：43-6602053428

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-9-260032810

マレーシア
セランゴール支部　KL
TEL:603-62563800
ペナン支部　Penang
TEL:604-2281013

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２６年１月２０日発行・３４９号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済伝播人文志業基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 8 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

静思堂がセントラルキッチンに変身

多くのボランティアが、清掃活動に投入したことで、体力を大幅に消耗してしまった。その補給のためのお弁当や飲み物、果物はどこから届けられていたのだろうか。災害支援の期間中、光復郷から車で約２０分の距離にある「瑞穂静思堂」が、物資の中継拠点となり、セントラルキッチンとしての役割を担った。

香積（調理）ボランティアが静思堂に泊まり込んで弁当を作り、機動（待機）チームがそれを車で光復郷まで運んだ。最も多い時で、一日に７千個近く運んだこともあり、１９日間で合計３万４千個余りの温かいお弁当を提供した。（撮影・詹進徳）

慈済日本サイト　慈済ものがたり